

## 博愛主義と利己主義

高瀬 武次郎

## 序

博愛主義も利己主義も昔から唱へられた説で、其の種類も亦た色々ありますが、總べて博愛と聞けば誰も心持好く感ずるが、利己と云ふ語は聞くだに不愉快に感ずるのであります、けれども、能く調べて見ると博愛といふ結構な説でも悉くは感心出来ない點があり、利己といふ不愉快に聞ゆる説にも、其れごと理由は附けられてあるのだから、兎に角一應研究して見るのも全く不必要ではあるまいと思ひます。

博愛といふ事は實に美はしき趣意にて其語を聞き其の文字を見るだけさへも人々に快感を與へ同情を惹き起す力がある、歐洲大戦亂は利己主義、個人主義、物質的文明の弊より起つたものであるが、其の戦争中にさへも、博愛とか正義とか人道とか平等とか云ふ語は諸方面に唱へられ、米國大統領ウキルソンの如きは正義人道を高く

標榜して非常な人氣を一身に集め、一時は世界的偉人と稱讃されたが、ウキルソンの正義人道は談判上の掛引に便利な看板に過ぎなかつたやうに見える、其の後ちウキルソンの人望は全く地に墜ちたけれども、兎に角彼の看板は世界人士の同情的注意を引いたのは、人が本性から正義人道を好み、一日も早く戦亂の慘狀から平和幸福の狀態に歸ることを希望したからである、又ウキルソンにしても唯だ看板にのみ掲げる動機から正義人道を用ひたのではないが、複雑な事情から障礙を蒙りて遂に其れが偽ある看板と爲り了つたのであらう、氣の毒にも亦惜しかつたと思ふ、人道の本義は博愛であるとは疑もないが、人道を蹂躪する横暴者が出て、利己主義を實行して世の中を攪亂するのであるけれども、人心は本來博愛正義の道を履むべき傾向を有するのであります。

## 耶蘇教の博愛

耶蘇教が博愛主義を標榜することは最も美はしき事にして何人も此の教旨に反對する者は無からうと思はれるが、サテ能く考へて見ると一概に善且つ美とは行かぬ點もあるらしい、耶蘇教國でございと威張つて居る歐洲文明國が、大正三年八月上

旬から約五年間に渡つて、大戦亂を起して、博愛どころか血を以て血を洗ふの慘劇を演じ、惡魔も及ばぬ極惡非道を敢てした。是れは博愛を説く宗教や道德の威力が衰へて眞の信者が無くなつた結果とも見える、必しも教義が悪いのではない、人能く道を弘むと云ひ、道は虚く行はれず其人を待て行はると孔夫子の示されたごとく、教義は立派でも之を弘め之を行ふ人が適當の人でなくては、折角の寶も持ち腐らしである、耶蘇教の「ゴッド」は愛の神で、全く愛のカタマリやうに、其の心は總て愛のみを現はすと説くらしい、愛に満ちた「ゴッド」が萬物を造るからには愛の現はれたるものと見るべきである、其の萬物の靈長たる吾人々類の心も亦た自ら愛に満ち、博愛を本性とし、又博愛を行ひ得べく造られてあるのだから、御互に博愛の念を以て交はることは、誰も心の底から好ましく思ひ、實際に博愛といふ話を聞き、文字を見るだに愉快に感ずるのであります。

天地萬物を生々化育する愛の「ゴッド」は天地開闢をしてから以來無限に萬物を生し生して一瞬間も息む時はない、是れが「ゴット」の徳であつて、愛の無盡藏な點が知らるゝ、周易には、天地の大徳を生と曰ふとありまして、天地は生々化育、萬古無窮を以て其れの徳として居る、此の生々化育が孔子の所謂仁である、天地間に瀾漫した大なる

仁である「天地萬物一體之仁」といふのは、つまり、此の根本の至大無限の愛から來るものであります。サテ「ゴッド」が萬物を無盡藏、無際限に生ずといふも、其間には生々滅々の現象があつて、生々ばかりではない、けれども、生々といふ方面から考へると滅々といふ事も亦た生々の一部分と云はれぬこともない、ナゼなれば、若し滅がなくて、一度生じた萬物がイツまで天地間に存在するならば後から後へと生々化育の作用を施すべき餘地がなく、天地は廣大であるとしても、其天地間に變化なく生じ生じてばかり居つたならば、滿ち塞がりて、スツカリ、動きの取れぬことになる、ダカラ、全智全能の造物者は滅といふことをヤハリ、生の作用の一部分として行ふのであります。考へて御覽なさい。若し人がいつまでも赤ん坊であつたらどうする、又た人がいつまでも壯年であつたらどうする、一人の女子がいつまでも、クレオパトラクレオパトラや楊貴妃や小野小町のやうな美人であつたら、どうする、老人になるとか、醜き老婆となるといふのは造物者の愛の作用の連續して熄まぬ結果であるから、老いて枯木の如くなつて死んで行くのは、ヤガテ新らしき萬物を生ずるの順序として避くべからざることであらう、是れがつまり、愛の神の靈腕を振つて無邊無量に愛を發揮し、所謂萬物の博愛の根源を爲し、天地間を悉く愛に満ちた淨土樂地と化せやうとして居るのであるが、其所に

は又種々の障礙物があつて、思ふやうに行かぬ、孔子の仁の道も、子思の誠の道も、皆な天地の根源から宇宙觀として人の必ず仁なるべく、又た誠なるべく、且つ仁も誠も須臾も離るべからざるものとして示されたるも、ナカ／＼人は仁を行はずして不仁を爲し、誠ならずして虚偽をなすのは古今東西の別はない、困まつたもんだ英國の「グリーン」の自我實現説も、明の王陽明先生の致良知説も同じく人間の本性上より説き起してあるもので、博愛といふも正義といふも皆な内部から起り來るもので、決して外部に在るものを眞似てするのではない、經驗や習慣で外部から收得したものでない、博愛の教旨は結構であるが、之には幾分か高きに過ぐる憾がないでもない、但し宗教は倫理に比較すると、其所に超越的な所があるのであらう、何となれば宗教は元來神や佛をタテリとするから、標準からして人間を超越して居る、人間を超えて高く行かうといふことになれば、其教も人間並みではいかぬ、人間並みの事で満足するのは倫理であつて、宗教ではない、宗教は一段高く成佛を説き、神の子と爲ることを希望する、なせ耶蘇教では神と成ることを許さぬかといふことは、問ふまでもなく、それは神が幾神で出來ては困まるからであるが、成佛を説く佛教は自由を以て勝さるか、此點は耶蘇教は獨一主宰で、壓制である、けれども其の壓制に反抗して獨逸のニーチエの

やうな人が出る、彼は宗教道德教を罵り、ゴッドを無視して自分自身がゴッドに代つて最上位に進むことを望んだ、ゴッドを眼中に置かない大膽不敵な態度で以て放言高論したから、彼はデウイルだと罵倒されて居る、ニーチエの説は脱線的妄説で取るに足らぬが、どにかく壓制に反抗して起た一人であります、泰西人は口に自由とか平等とか云ふ癖に宗教上に獨一主宰のゴッドを奉ずるのは珍現象であるまいか、此點は佛教の方が自由平等と思はれるが、神に成ることを許すならば其れは先づ其れまでとして、トニカク、人間以上に達するの心願があれば、ドウシテモ、超人的の事を行はねばならぬ、普通の人情を土臺としてはドコまでも人間を超越することは出来ぬ、此説は崇高であり、殊勝であるが、そこに行はれ難い點がある、此所を次の例を以て説て見たいと思ひます。

忘れてならぬものは恩である、忘れてよいものは怨であるに拘はらず、どかく、人は怨を忘れずに恩を忘れるのは實に悲むべきことゝ思ふ、達觀して恩も怨も兩つながら忘るゝに至らば却つて結構だが、なか／＼其所には行かれぬ、故に普通の人情としては恩怨兩忘は望まれず、又た恩にも怨にも適當な方法で報いたら宜しからう、今の世の中には恩に報ゆるに徳を以てすることさへなきのみか、甚しきは恩を仇で返へ

す不埒ものさへある、さて、論語に孔子の門人が、或人の説として「怨に報ゆるに徳を以てす」といふ教があるが、是れは如何でありませう」と御尋ねした時に、孔子は一言の下に之を排斥して「怨に報ゆるに徳を以てせば徳に報ゆるに何を以てするか、徳に報ゆるには徳を以てし、怨に報ゆるには直を以てせよ」と示されてあります、此所の或人の説といふのが、老子道德經に見えてあるけれども、是れが果して老子の説であるか、又は其他の人の説であるか、以前から世間に流布してあつた説を、老子が同主意の語だから取つたのであるか、今から何んども判定は出来ぬけれども、報怨以徳又は以德報怨と云ふ語は、明白に孔子の教義の範圍を超越して居ることは、孔子が取らずして言下に拒絶したので知られる、孔子は道德家、政治家と謂ふべき人で、所謂宗教家ではないから、ごこまでも、人情を基本として教旨を立てゝある、神秘的な所や、超越的な所はない、子は怪力亂神を語らずとある通りであり、孔子は大學に示されてある通り、治國平天下が目的であつて其れより以外には行かれない、極めて嚴格に教義の限界思想の範圍が守られて、決して漫然之れを越ゆることはありませぬ、門人が死後の靈魂の有無を問ひし時も、答を避けてあり、又た鬼神を問ふた時にも答へず、總て現實社會の事、日常事物の内に在て仁道を盡くし、安穩幸福な人類社會を實現することに力

を注がれたのであります。斯の調子で押し通して、決して一時都合の好きそうな説を立てない、怨に報ゆるに徳を以てす」といふ説は表面上大層面白いやうであるが、孔聖は全く之を取らなかつた、ドコマデも、平生の範圍を守つて怨に報ゆるには直を以てせよと示された、直とは正當な方法を指すもので、怨の大小深淺に随つて、之を返報する方法も異なるが、直にして正なることを失はぬことを旨とする、怨に報ゆるに怨を以てしては、ハテシなく、怨を連続する事になつて、血を以て血を洗ふ、慘中の慘、酷中の酷を現出するであらう、故に孔子は直き道を以て怨に報せよといふ、國家に仇を爲す敵國あらば之を征するの義戰を起すことを非とせぬ、其他にも大小に随つて正當に自分を防禦すべきことは言を待たぬ、孔子はドコマデも、倫理の限界を脱しないが、宗教になると自ら異なる點があります。

耶蘇教の博愛を充分に擴充到底すると遂に人を愛せよ友を愛せよといふ限界を超えて「汝の敵を愛せよ」汝の右の頬を打つ者には左の頬をも打たせよ「汝の上衣を奪ふ者にはシヤツをも與へよ」といふに至るであらう、是れは過度の愛であり、無限の慈悲である、逆縁も洩らさず救ふといふ非常な大愛である、此耶蘇教の説が老子の報怨以德の意味と同じいものだから、米國「シカゴ」の「ポール、ゲーラス」が老子道德經を翻譯し



且つ論究した著書の卷頭に特別に目立つやうに朱字を以て報怨以德と刻し、之と並べて「レクイツド、ヘーツレツド、ウイズ、グードネス」と書してあるのみならず、其の書の中にも口を極めて之を讚め、老子の此語は耶蘇教の教旨に合することを示してある、且つ英國の「ドウグラス」の著、コンフーシアニズム、エンド、タライズム」と云ふ書中にも老子の報怨以德を論じて「レコンペンス、エヴル、ウイズ、グード」と云ふは耶蘇教の大なる光榮の一なる格言に合するが故に貴ぶべきものだ」と稱讚してある、老子の語が耶蘇教の語と合するとてマルデ、空谷に梵音を得たやうに喜んで居ることは、やはり、老子も道教といふ宗教の祖師と仰がるゝ人なれば其語は簡單なものであるが、恩怨兩忘といふ邊より、怨を忘れ恩を忘れるといふ大度量の上より怨に報ずるに徳を以てすと曰はれたのでありませう、宗教は超越的であつて、普通の人情からは、トテモ、望まれぬことを教へる、若し之が實行さるゝならば結構であるが、ナカ／＼ムツカシイ、餘り殊勝であり、餘り高尚であるから、大抵は實現されないで、唯だ立派な粧飾品の如くに掲げられてあります、若し之が實行さるゝならば大戦亂は起らぬ、世に掠奪や強盜はなく、他國を侵略して自分の屬國にすることもなからうか、耶蘇教國民でゴザイ、文明國人でゴザイと云ふ西洋人が支那では洋鬼と呼ばれて居る、洋鬼は「ヤンキー」と云ふ發

音であるが、亞米利加人には限らぬ「フォーレン、デウイ」の意味であつて舶來の鬼と謂はるゝ程に東洋特に未開半開の民を虐使酷遇して、自己のみが利益を占むるからでありますよ、ホントウニ、美はしき格言教義も實行されないと、品物が粗末で上に貼つたレッテルばかりが優美高尚なものと似て居ると思はれる、博愛主義の看板も結構だか、實行難に終つては何の効力もありませぬ。

博愛といふは總ての場合に普及すべきもので、人類界のみならず、草木禽獸等にも普及すべきである、所謂天地萬物一體の仁は頗る廣汎な博愛である、博愛之を仁と謂ふとは唐の韓退之が原道篇に於いて仁を定義したものであるが、是れは寧ろ狭き意義の仁と見える、博愛の極度は四海同胞、一視同仁といふに至るべきものであるから、個人間は勿論のこと、國際間にも適用すべきであるが、世には「國際間に道德なし」と明言して憚らぬ者もある、此言は忌むべきやうに思はれるが、國際間の交渉には唯だ相互に奸計を弄すべきものゝやう感ずるが、實に情けない次第と思はるゝ、樽俎折衝と云ふ語を聞き、縦横策略を弄することを見ると、今も昔も外交に誠實なしとも謂ひたいが、決して外交の正道を得たものではなからう、國際談判といふも、やはり、信義を重んじ、正道を履むものが最後の勝利を獲ることは古今の通義で、特に文明の進歩する

に隨つて段々と此正道に合すべきものでせうが、強國が横暴を極て正義を蹂躪し、時には其の横暴の道具に博愛主義の宗教を利用するに至つては言語同斷ではありませぬか、けれども、其れは妄用する人が悪いので博愛を説き利他を旨とし、其極度には怨敵さへも愛すべしと教ふる宗教が悪いのでは決してない、自利と利他とは兩立し難い場合が多いのみならず、ドウカスルト、利他を忘れて自利に流れる、今の世の社會に囂々たる勞資關係も全く是れであるから、若自利の念を薄らめて、利他に傾けば、何の面倒もなく解決さるゝのであらうが、全然自利を謀り、自身の權利のみを主張し合つて、我利亡者の集團の衝突に立ち至つて居る、博愛などは夢にも知らぬ連中ばかり、末世澆漓といふのも、オカシイガ、さればとて此の忌むべき情けない現象を文明的とも進歩的とも謂へぬではありませぬか、我利と我利とが相對し年が年中、睨み合つて居るのが現代的でせうか、人道も何んにもあつたもんでない、人道の本領は博愛であり、博愛は仁である、昔から今に至るまで聖人賢人の教かれた教義に博愛仁恵を説かぬものはない、孔子の仁も、耶蘇の博愛も、佛の慈悲も、墨子の兼愛も、皆な人の眞性を説きて教旨としたものであつて、自利、利己、爲我、愛己等の語は其反對を示すものであります、戀愛の愛も亦た愛の一種であるが、是れは別問題として粹な専門家に譲ること

にしやう。

## 佛教の慈悲

佛教は其の教理は深遠で、宗教としても、哲學としても内容の豊富なることは世界無比である、又た人類の迷溺苦惱を救濟するを以て眼目とすれば、佛は世界の救世主なれども、今此の博愛といふ問題に就て取り分けて論ずる場合には、餘り廣大で要領を提げることが困難であります、慈悲といふ語は佛教の博愛を示すものと思はれるけれども、全く同じ意味であるか、或は少しの差はあるか、頗る明かにしがたいが、今は先づ同じものと見て置きます、佛教にも愛の意味を直接に示してあるものもある、例を擧げると、大慈大悲といふ博愛の外に歡喜天は愛を主とするといふか、寧ろ戀愛の方で、博愛ではない、少し縁は遠いが、北京の雍和宮へ行つて見ると、喇嘛教の佛畫には此種の愛を示した頗る露骨な像があるが、此等は今論ずる博愛とは違ふから説きませぬ、サテ佛は慈悲とか柔和とか、忍辱とかを旨とし、況く人を愛するといふも、佛の中には不動明王は恐しい猛烈剛勇の相好を示し居るから總べての佛が博愛慈悲を示して居ると思はれぬ、耶蘇教のゴッドのやうに、一神だど話が分り易いけれども、多

數の佛があるから、一寸簡單には説けないらしいのみならず、宗教だから世間的博愛主義とは趣旨を異にする所があります、其上に佛教は耶蘇教が博愛を標榜する程にはつきり慈悲を標榜して居ないやうに見えます。

### 墨子の兼愛主義

兼愛と云ふ語は墨翟が唱へたもので、ツマリは、博愛と同一であるが、墨子は兼愛交利と云ひ、兼收愛し交々利せよと教へて居る、墨子教は無論、政治道德を主として、宗教を主とせぬけれども、其の教義の組織の全體より見ると、耶蘇教と殆ど同一である、耶蘇教は墨子教に宗教といふレッテルを附けたやうなもので、其内容は何の差異も無いと思はれる、墨子教を東洋出來の耶蘇教と見れば間違はない、墨子はゴッドの代に天を説て、全智全能宇宙の主宰として居る、此天が天地の萬物を生ずる造物主で、天は兼愛を以て其志とし、萬物を悉く同一に兼ね愛して遺さぬ、此天に由つて生せられた人類は兼愛を以て心として、常に兼愛交利を行へよと教ふるのです、其の説明は極めて詳細に今日傳はる墨子の中に示してあります。

墨子は孔子と並び稱せられて、先秦時代には孔墨の賢と云ひ、又た孔席は暖かなら

す、墨突は黔ますといふ如く、常に賢人として、又た熱心に社會救済に奔走したことが稱せられてあります、墨子は政治家、徳行家であるが、孔孟とは少しく肌合が違ふ點がある、其の著書から見ると、人物に大小の差はあるが、墨子は我國近世史上の人を以て例示すれば、二ノ宮尊徳や、福澤諭吉のやうな傾向の人である、何事も皆な實用實益と云ふことを主眼とした人で、兼愛交利、又は相愛相利といふも、皆な社會政策の上から來たのであるから、勤儉、力行、節用等を主張するのみならず、實生活に直接緊要ならぬ音樂を排斥した、孔子は禮儀と音樂とを以て治國の要具としたるに、墨子は全然非音樂論者でありました、其外葬を薄くし、喪を短くし、死者を刻して生者に増すの方針で、葬式等に費す財物は充分に節約して生存せる人類の利益を謀るといふ、全然實利實用主義で、遂には沒情的行爲に陥るに至つたのも、ツマリは現社會を兼愛交利するの旨を徹底的に行ふたのに過ぎぬ、餘り打算主義、現實主義であるから、典雅、優美、風韻、高尚、といふ點を沒却することになつたが、其精神は決して非とすることは出来ない、其當時の社會の實狀を目撃して、救済の最良策と考へたからである、ツマリ極端に馳せて世の非難を蒙るに至つたのであります。

墨子が兼愛交利を説くにも自身の兩親兄弟等に對するも他人の兩親兄弟等に對

するも全く同じくせよ、其間少しも親疎厚薄を見るべからずと教へるのであるから、終に無差別的平等の愛と爲る、所謂惡平等的博愛と爲るのであります、チヨット見ると結構なやうに見ゆるも能く考へると人情に反することが分る、過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとしとは此類を謂ふのでありますやう、博愛といふも兼愛といふも同じことであるが、墨子が兼愛を唱へたのも救世的精神を以て當時の弊風を矯正する目的であつた、其頃は戰國時代と曰はるゝ程に侵略攻伐を以て賢として、墨子が所説と相容れぬ別愛交賊が行はれた、時代は大に異なるも、歐洲大戰亂の慘毒に懲りて平和を熱望し、頻りに平和會議を開催して、永遠の平和を謀つて居るけれども、電報の報ずる所に據ると、今日もやはり戰爭して居る國がある、濱の眞砂は盡きても戰爭は熄まぬのかしらぬ、でも情けない世界ではありませぬか、墨子の愛説は萬人に同様に愛を施し、親疎の差別を言はぬ、全く無差別平等の愛を施すのであるが、其の愛説は皇々たる上帝が下土を照臨し、萬人に對して毫も厚薄親疎の別を立てぬ如く、吾人は人に對して一様平等に愛を與ふべしとするので、親子も相愛相利し、兄弟夫婦朋友も相愛相利し、小大貧富強弱も相愛相利し、君臣も相愛相利し、國と國とも亦た同じく、世界一切の人を愛利すること猶ほ自分自身を愛利すると同じくせよと教ふるのであつて、其間

に於て愛を施すには遠近に随つて前後の差はあるも、決して厚薄を見など説くのであります。國家社會の治亂興敗は言ふを待たず、一人一家の貧富、安否、榮枯、盛衰等に至るまで皆な兼愛交利と其の正反對の別愛交賊とに由るのであるが、カクバカリ熱烈な愛他主義で愛己を非とするやうであるけれども、其の眞意を洞察するに、彼は自己を忘れてシマツて愛他に純一なれといふのではない、ツマリハ眞正に又た穩當に自己を愛するを骨子とする、彼は愛他を外にして愛己を求むるのは、愛他を先として愛己を求むるの安全で又た有效なるに如かずと認むるのであります。凡そ人情は彼が我を愛するならば、我も亦た必ず彼を愛する、彼が我が兩親や兄弟等を愛するならば、我も亦た彼の兩親兄弟等を愛する、若し之に反して、他を害せば必ず怨を買て自身も亦た害せられることになる。隣人に對しても一般社會に對して、愛の返報の道理は同一であるから、此理を徹底的に實施して、吾人々類社會は相愛相利の中に相互に安寧に又た幸福に進歩するのが、墨子教の最大眼目である。テスカラ、結局墨子の説は汎愛的功利主義と見らるゝが、墨子の愛説には大きな弊害が伴ふ、といふのは、其説が人情に合はぬ、近く考ふるも、自分の親も他人の親も同一様に愛するといふが、出来ない注文である、全く非人情的であつて孝道を害する、孟子が此點を攻撃して「墨子の言は父



を無視するもので、全く禽獸の道である、人間の道ではないと罵倒してある、元來人間には親疎厚薄のあるが天然の眞情であり、又之れでこそ世の中の秩序が維持されるのだから、之を無視して教を説く所に深い缺陷がある、故に墨子の兼愛説は孟子の頃には一時世間に流行したれども孟子の痛撃の爲に、又教義に缺陷の存在する爲に秦漢時代には全く衰滅した、孟子の威力は非常なもので、遂には楊朱の利己主義も墨子の兼愛主義と同様に没落した、孟子の勢力は漸次に擴大されて孔孟と聯稱され、其遺著も論孟と聯稱され、儒教の別稱を孔孟の教と云ふことになつた、邪は到底正に勝つことは出来ぬ、墨子は實用實益の點から愛利を説くので、眞に深く哲學的に宇宙の本源から人間の眞性を探究して愛他は人の本性なればといふ根據から出發したのではない、天の志を説き天を本源に立てた所は宜しけれど、功利主義、爲我主義を離れない點は賛成の出来ないであります、宗教的熱情もなく、功利の念を土臺として説くから、耶蘇教の博愛と酷似しながら終に著しき差を見ることがになる、けれども、若し今日世界に轟然と爭議せられて居る勞資問題を解決するには墨子の説で充分であらう、私は西洋に居るときに、泰西文明國にはまゝ墨子の説が實行されてあると思ふたことがある、又た時には此種の所感を私の日記に書いたこともある、西洋には功利

主義の行はれ、打算的な點から自然に墨子流の遣り方が出るのであらう、我邦にも小墨子が澤山に居る、我利と我利とのイガミ合ふ今日には、墨子の兼愛説も頗る貴重でありませう、又た今日平和とか、非戦とかいふも、墨子は二千五六百年以前に盛に平和主義を以て列國を遊説したのである、が、イツノ世にもドコノ國にも戦争が善いと云ふものはない、授爵や、金鵄勳章を冀ふサーベル連が、或は戦争を善と云ふかも知れぬが、其れは只の慾張りで學説ではない、昔から戦争が善いと説いた者は只の三人しかない、ツマリ戦争は勢の已むを得ざる場合に起るので、戦争が善いといふ道理は決してない、非常な慘毒を人類に與ふる戦争が、何んで善からう、戦争が起るのは人類の目が慾に暗らみ、良心が全く痲痺するからである、故に戦争は眞に最大の罪惡である、兼愛の爲に墨子が二千五六百年前に唱へた非攻主義を、今日も世界の列強が相集つて論議するが、ソレハ宜しとして其の平和會議の歸途に軍艦の注文をするといふ風では、ホントウニ困る、各國が眞に心の底から平和を熱望するなら、ナシニモ會議の必要はない、サツサと軍艦や大砲を打ち毀して、兵隊を散すればソレデよいのだ、何の世話もない、墨子の説が孟子の鋭利な舌鋒で打ち破られて後ち、二千數百年も経過した近年に、復び孟子の研究が支那で流行するとは、時勢の然らしむ所であらう。

## 天地萬物一體の仁

仁の内容は極めて廣大であるから一朝一夕に説き盡くすことは出来ぬけれども、其の骨子となるものは愛である、親愛博愛汎愛と色々の熟語を以て示し得るが、仁の最大意味は天地萬物一體之仁である、論孟には此語はないが、禮記には聖人は四海を以て一家の如く考ふると謂つて、四海同胞、一視同仁の旨を表はしてある、此意を承け繼で、宋の程明道は仁者は天地萬物を以て一體と爲すと説いて、仁の至大至廣の意味を發揮された、張横渠も其の西銘に於て、乾を父とし、坤を母として、之れに事ふるの大仁を述べて、小我に拘束されて大我を忘るゝの非を諭し、明の王陽明も大學問及び拔本塞源論に於て極めて詳密に天地萬物一體之仁を説てあります、我邦の陽明學者中根東里は其學說の中心として天地萬物一體訓を標榜し、大鹽中齋も張横渠と王陽明の思潮を繼で、太虛主義を立て、洗心洞劄記其の他の書に之を横縦に論示してあるが、今此等先哲の所説を縷説することは出来ないから、皆な其の遺著に譲ることに致します。

凡て差別の中にも平等があり、平等の中にも差別があるものである、無制限に無差

別平等と云ふと、惡平等に陥る虞がある。差別ありて其中に平等の意義が存すると、宜を得るのであるが、差別と平等とは常に並び行はれて戻らぬものである。此所に中庸と云ひ中和と云ふ道が行はれて、過もなく、不及もなく、衝突もなく、波瀾もなく、萬事平穩無難に進むのであるから、博愛とか、兼愛とか、天地萬物一體之仁とか、廣大な意味の中に差別的な親疎厚薄の秩序が行はれる、世界主義も可なり、國家主義も可なり、家族主義も可なり、個人主義も可なりといふと甚だ矛盾衝突があるやうなれども、時處位に隨ひ、臨機應變に、此等の諸主義を好都合に實行し得るのである。皆な此間に道は並び行はれて戻らぬと言ひ得る。早い話が、博愛主義だからと謂つても、無限に他人を愛し、自分の所有品を悉く與へずとも宜し、自分が風邪に罹るのも顧みずに裸體になつて衣服を貧人に與へずとも宜し、適度に愛を施す方法がある。世界主義に到達せねばならぬと謂つて自分の生れた國家を無視するのは亂暴である。國家を愛護しつゝも世界の人類に同情の愛を施すことは幾等も出來ませう。其他の大小廣狹皆な同様であるから、萬事に中庸適度を守るが肝要であります。家族主義者と個人主義者が議論を闘はして極端から他の極端まで論ずると、大變な差異懸隔を示すであらうけれども、實際日常生活を能く考へて見ると、或程度までは兩主義は並行し得ることがある。

半分は個人主義の所も見え、半分は家族主義のやうに思はれる、多く個人主義が行はるゝと云ふ西洋の家庭にも親子兄弟が同住して居るものもある、此の問題は取り立てゝ論ずると限りもないが博愛を實行する心持で、又た世界主義を實行する心持で、自分の力の及ぶ限り、博く人を愛するといふ眞意を抱て居れば、國家主義、家族主義、個人主義も、或程度までは並行して戻らぬ、やれ世界主義だからと謂つても、各人の力には限りがあつて、富力でも智力でも思ふがまゝに廣くは及ばぬ、博施濟衆といふて、博く施して衆を濟ふと云ふことは、孔子も仁以上であるが、實行は困難である、曰はれてある、幾億萬の金を有する人は施さぬことが多い、施す意志のある慈善家には、アイニク、金がない、トニカク愛を施するにも差別あり、秩序あり制限ありて、親疎に隨つて厚薄を爲すと云ふのが一番穩當であります、羊頭を掲げて狗肉を賣るといふこともあるが、餘り看板ばかり好いのも宜しくないが、利己主義に較べると、博愛主義は勝れて居る、説は種々あるがどちらにしても、完全であるが、利己主義は油斷がならぬ點があります。

## 利 己 主 義

利己主義といふ言葉を聞くさへゾツトするやうである、アイツは利己主義だといふのはアイツは高利貸だといふのと同じやう、何かイヤナ感じがする、其イヤナ感じのするのは決して偶然ではない、其の由つて來る所は頗る深く遠いからであるから、故文法兩學博士加藤弘之先生が利己主義を唱へて、道德法律進化之理、其他の著書をするときにも、利己といふと人ぎゝが悪い、から、之を都合好く改めて愛己主義といはれた、ツマリは利己主義だが、是れで幾分か上品に聞える、チョツト學説らしく聞えるが、加藤博士の心勞は御察し申します、村上專精博士が嘗て加藤さんと云ふ人は面と向つて話をする、と、誠に情にも厚い好い人で、立派な大家であるが、其の著書を見るとひどく冷刻に感ずるが、ドウユウもんだらうと語つて居られた、ンレハナンニモ、疑もない、利己主義的立論だからである、博士は眞理を研究して、其の探求し得たる所から、敢然として人間の本性は利己なり、性惡なりと發表したのである、明治三十二三年頃と記憶するが、加藤博士が其の心血を傾注された大著述、道德法律進化之理を發表したときは、學界に非常な反響があつて、諸方から攻撃が起つた、其要旨は愛己主義は忠君愛國の大徳義と相容れざるの虞ありと云ふことに一致した、多數の攻撃に遭はれた博士は之を一括しての答辯の大講演を哲學館で催された、私も其時、チョウド、哲

學館の講師であつたから、博士の辯駁講演を聞ききました、其の講演の要旨は雜誌「東洋哲學」に載せてあると記憶するが、概括して言へば、余は眞理の爲に眞理を研究したので、忠君愛國との合否は別問題であるが、愛己主義は決して忠君愛國の大徳義に戻ることはないと云ふ結論であつたが、是れが頗る怪しい點であると思ふ。

進化論を基礎とする愛己主義は博士が主唱したもので、我國維新後の哲學史上にはトニカク、異彩を放つものであらう、此點はサスガに偉い、が、進化論はダーウインの如く、實驗的に、博物學に於て證據を擧げて居る間はまだ取るべき説も多いが、博物學上に眞理らしいからと謂つて、放膽的に推測して之を精神界に應用し、愛己説を説くのは取るべからざるものである、しかし、斯かる大膽な應用は既に英國のスペンサーが實行した、スペンサーが此の應用に對する駁論は十數年前に丘淺次郎博士が發表し、私も其れを讀で私かに賛同の意を表して居ります。

全體人間の祖先は猿であるなど云ふのが、おかしい、人間は最初から人間だし、猿は初から猿だ、鼠はイツも鼠なり、猫はイツも猫である、雀が海に入つて蛤と爲り、山の芋が變じて鰻と爲ると云ふオカシイ話があるが、人間の元祖が猿であるといふのは實に人間を侮辱した妄説である、生存競争、優勝劣敗、適者生存、不適者不生存といふ自然

淘汰は信すべき説なれども、人間の元祖が猿なごいふ愚説は癡人の夢物語である、證據は何んにもない、世界の始から猿が人間に進化をしたことはないが人間が猿真似とか猿智慧とかいふて、猿に縁のあることはある、又た猿に似た人も多くある、人間は猿より毛が三本多いから人間が猿よりも偉いといふことは昔からある説である、織田信長が、木下藤吉郎を鑑定して猿と謂つた、此猿は日本開闢以來に二人とはない快男子である、沐猴にして冠する者といふ猴なら、現今の天下滔々として殆ど皆な然りである、良心の疵痺した、我利一邊の人、敏捷に立ち廻つて貪欲な者、マルデ猿猴の如くで、シカモ、紳士然と、帽子を被つて居る、之が沐猴冠者でなくて、なんであらう。

愛己説は一切の心的現象を自利的衝動に由りて説明しやうとしたのであるけれども、共、ソレハ不可能である、愛他的衝動を聯想に由りて愛己的衝動の變化したものと説明しやうとしても、不可能である、加藤博士の説は英國の自利的功利主義論者、ベンサムからも多く得て居る、ベンサムは達見である、と稱讚して居るが、其は、自分と意見が同じいからである、ベンサムは荀子と韓非李斯とを合せて之に管晏の功利を雜へたものと思へば間違ない、巧妙に最大多数の最大幸福と云ふ説を立つるも、功利主義は其根柢が善くないから、取るべからざるものである、孔孟は徳治主義で、管晏を非と



するのであるが、管仲の仁の功は認められてある、尙ほ博士は荀子の性惡說物徂徠、二宮尊徳の説をも達見と謂て居るが、徂徠の學説はすつかり荀子を繼承したもので時代と國土とは異なるも其説は大同小異である、人間は利己主義で、本性は惡であるから、之を外部に存する道、禮、善に同化せよと教ふのが、荀子等の説である、道と禮と善とは同じものである、本性を惡と見て之を外部の善に同化せしむるのが、所謂教化であると説く、荀子の學説に進化論の御化粧を施したのが加藤博士の進化論的愛己主義であります、孟子は性善説を唱へて孔子の遺教を闡明し、儒教的性説を説き盡くして思想の正系を立てられた、然るに荀子は之に反抗して性惡説を唱へ、儒教の本領を失ふて韓非や李斯の如き法家を出だし、儒教の圈外に排斥さるゝに至つた、荀子は道德は人爲的と説き、内部には惡のみとした、凡て道德が内部的のものでなく、全く外部的のものとするから、極て淺薄なものとなり、少しも尊嚴を有せぬ、其れ故に教育上にも修養上にも、不安の感を免がれぬのは道德的根本がないからである、博物學者の進化論が勢力を得て、哲學者迄が其風に靡いてからは泰西にも種々な説が出た、加藤博士も同様に人類を下等動物の程度に引き下げ、古來の教祖偉人の説いた説を排斥し、耶穌教の人は神の子といふも、儒教の人を天地に配して天地人三才といふも、佛教の一

切の衆生は佛性を有すといふも、仁義禮智の人心固有といふも、良心固有といふも、人は萬物の靈長といふも、皆な眞理にあらず、全く誤れる見解であると謂ふて居る。隨つて人の尊嚴、崇高、典雅、優美といふ如き點を失ひ、下品な、劣等な、野卑な、下等、動物的な部分のみが著しく目に着くやうになる。世界にカ、ル淺薄な學風が行はれて、人心が愈墮落して、唯だ物質的欲望のみに趨き、道德も宗教も漸次衰頹する世の中となつた。此時勢に反抗し、猛然と立つて破邪顯正の偉功を奏したのは英國の「グリーン」其人である。「グリーン」は自我實現説を唱へた、彼は天地萬物の本源を絕對精神と爲す、吾人々類は其の性を稟受して生れて居るのであるから、絕對精神の顯現に外ならぬ、故に其の絕對の本性を自己の修養的努力を以て漸次此の世の中に實現することが出来る、自我には絕對と同じき精神状態に進み行き得る可能性を本來具備して居る、其可能性を實現するのが、人生の目的であると説かれた、王陽明先生の致良知説と全然符節を合する如くである、陽明先生は人の良知を説くのみならず、宇宙的良知を説き、宇宙と人間との良知の融通不二なることを示し、天理の人心に在る之を良知と謂ふと主張して熱心に良知を致すことを唱へたのであります、眞に宇宙の眞理を悟り、道を知つた人である、誠に立派な説である、古來の大聖人、宗教の教祖、學界の偉人は皆な内部に

道徳性を具ふることを説かれてある、之が教育上にも修養上にも、徳行上にも、安全順調便利であるのみならず、サスガニ、聖賢偉人で能く眞理を示されたものである、之に反して人を下等動物にコキ下ろして、利己とか性悪とかいふ説は古今東西にも極めて少數の人しか唱へて居ない、少數必しも非眞理でない場合もあるけれども、利己説は誠に僻説である、人をして墮落向下の氣味を感せしめ、向上せしむることがムツカシイものである、本性に反したものであるから、利己説を聞くだけに不愉快に感ずるのであります、自己を悪性の者とし、利己を本性と認むることは、自己を善性の者とし、利他を本性と認むるよりも、困難である、何となれば人情としても自分の性の善良を喜ぶものである、汝は性善人であると謂はれた時と、汝は性悪人であると謂はれた時と、ドツチが心地好く感ずるであらうか、盜賊でもキサマは盜賊だと言はれた場合には、ヤハリ赤面する、其れはツマリ内部の良知が恥辱を感ずるからである、内部に聖種ありとし、之を發達するやうに導くのが、順當で便利で又た有力である、カントが無上命法を説き、フイヒテ「ガ」ゴッドは吾人の心に在りと云ふが如きは最も深遠な説であるが、「ゴッド」が各人の心に在ると説ては、耶蘇教の一神説と抵觸するから反對が起つて、後には少しく變じたと傳へらるゝも、唯一神が天に在りと定めて、其他の説を許さぬの

は統一を謀る便宜的政策を主とするので、必しも眞理だからと云ふのではない、西洋の哲學者は「ゴッド」に論及すると大抵は平日の銳鋒も鈍ぶり勝ちである、餘り大膽に論破すると、迫害され又は破門される、其例は歴史上にも著しきことである、「フィヒテ」は其の性行も學說も王陽明に能く似て居る、西洋の王陽明と謂ふべき人で、眞に道を悟つた偉人と思はれる、先年哲學館事件で喧しかつた「ミュアヘッド」の如き人は書を著はして巧に倫理學を説き、動機論を主張するも、其書を熟讀する中に、彼は未だ道を悟らぬ人である、と知られた、淺薄に口眞似に上手な者と根本的に宇宙の眞理を了悟して居る人とは大に違ふのであります、トニカク、愛己主義の學說は世人に誤解を生じ易いものである、加藤博士の愛己說も論辯の理路は井然たるやうに見ゆれども、惜いかな、大本が已に誤つて居るから、到底一破綻を免がれない、大徳義たる忠君愛國を利己一點から説くことは無理である、周末の楊朱の利己快樂說も孟子の痛撃を蒙つて、忽ち衰亡に歸した、孟子が楊朱の利己主義は君を無視するもので全く禽獸の道である、人間の道ではないと罵倒してある、楊朱は極端な爲我主義で一毛を抜て天下を利するも之を與へずといふのであります。

## 楊朱の爲我主義

個人主義は自己さへよければ、他人はドウデモよいと云ふに陥る、故に個人主義は  
自利主義であつて、愛他の念のないものである、今日社會奉仕とか、世界奉仕とかいふ  
流行語を聞くのは、此の利己的個人主義に反對するのであらう、現下の勞資問題の囂  
々たるは、ツマリ、兩方とも利己快樂を主眼として相互に怨敵の如く睨み合ふからで  
ある、尙ほ其の中間に介在して利己的欲望を恣にし、又た虚名を博する煽動者がある  
から、世の中は罷業とか、サボタージとかいふ紛紜騷擾は絶へないが、一言で之を評す  
ると、利己主義といふに歸する、之に比較すると楊朱の利己快樂説は上品で高尚であ  
るが、其れには深遠な根本思想があるからである、即ち楊朱は老子の直弟子で、老子の  
虚無恬憺、抱朴守靜、謙虚卑弱の要旨を得て居る、彼は全然利己であるから、世人の爲に  
一物をも與へぬ、其の代りに天下の富を與へる者があつても亦た其れを受けもせぬ、  
眞の意味の不受不施である、自己の天賦の眞性を保全するといふ老壯的態度を嚴  
守して居る、今日の一文でも多く貪り、人には與へぬと云ふ利己主義とは雲泥の差で  
ある、其の利己で世は治まるといふのは、甲は甲自分の身を治め、乙は乙自身の身を治

め、丙丁戊等無限に各自其身を治めば、他人の世話はせずとも、立派に世の中は行けると考へた、煩はしく相互に世話をやき合つても行けるが、之れに反して人の世話をする代りに、自分の事は自分でせよと云ふ言葉を守つて行けば、それでも世の中は治つて、皆な安穩であるといふのであるが、楊朱は此説で押し通して居る、其上に彼は快樂説を唱へて居るが、是も老壯風であるから、消極的、抱朴的に自己の天真を保つ上の快樂である、決して酒池肉林、長夜の飲を爲すのではない、紅燈綠酒、花柳の巷に放浪するのでもない、今の成金連が、藝者や仲居を自動車に満載して他人の迷惑をも顧みず疾驅して、花見遊山に出掛るやうな陋劣な快樂とも違ふ、楊朱の利己快樂は極て上品で弊害が少いやうであるが、是れでさへ利己快樂と云ふ説が世俗に傳はると漸次變化して虚無恬憺の性質を失ひ、全く物質的な又た積極的な俗悪なものとなつて、非常な害毒を世に流した、故に孟子の時には楊墨の言は天下に滿つ、楊に歸せずんば必ず墨に歸すと云ふ勢であつたから、孟子は一方には性善仁義を説き、一方には楊墨を攻撃するに力を盡くした、其の攻撃の効果は空からず、楊墨の説は周末に衰へ秦漢の頃には殆ど滅びてしまつたのである、孟子が楊朱を攻撃するのは老子を攻撃するのである、孟子を讀んで何故に其鋭き舌鋒を老子の末流に向けぬかと怪む者もあるが、老子の

思想の利己快樂と爲りたるが、楊朱で、其の末流がチヨウド、孟子の頃に濁波を揚げて世の中を汚して居たのである、私は楊墨哲學は已に別に論述してあるから、今此所には大要に止めて置きます、サテ、等しく異端邪説と罵らるゝ中にも多少の優劣はある、墨子の兼愛は楊子の利己よりは害が少なからう、墨子の兼愛は仁に紛ぎれ易く、楊子の利己は義を害し易いが、兼愛は、トニカク、愛を無限に普及するのであるから、少しく用愼さへすれば萬物一體の仁に導き得ることもあると思はれる、故に儒者の間にも張横渠の西銘と兼愛とを比論する者があつて、其間精細な區別をするけれども、要するに利己主義のやうに悪いことはないのであります。

清朝の俞曲園が性を論じて、荀子の性惡説を取り、孟子の性善説を非として居るけれども、曲園は極て淺近な意見で、別に深く考究した結果ではない、彼の要旨は性善と云ふも教育が必要であるが、性惡と云ふても教育が必要であるのだから、寧ろ性惡と説きて子弟を勵ます方が効果が多からうと考へたので、ホンノ月並みの説で、哲學として見るの價值はない、支那で性惡と説いた者は荀子韓非と、愈曲園と、唯だ三人のみである。

多數であるからと謂つて、ソレデ、眞理と斷定することは出來ぬ、便利であるからと

謂つても眞理とは決定は出來ないが、唯だ此の博愛説と利己説との場合は博愛説は世界の三大聖人及び其流を汲む者が皆な之を眞理として居るから、多數決から見ても疑はない、之に反して利己説は支那日本西洋を通じても極めて少く、恰も曉天の星の如くであるのみならず、其人々は到底博愛説創唱者に比すべき者ではない、利己説は贊同者が極めて少いのみならず、人類に何等の益を與へて居ない、且又た人を教導する上から見ても博愛説は利己説よりは便利である、恰も順風に帆を揚げるやうであるが、利己説で人を導くのは恰も風に逆つて進むやうであるが、之に反して、利己説は人を墮落せしむるには至極便利な説であることは何等の疑はない、シカシ、教義や學説は人を善くし、人を向上せしむる爲であつて、悪い方へ導くものは決してない、右の如くであるから、多數と便利から考へても、博愛は眞にして正なることが分かるのであります、現下の社會問題は皆な悉く利己的墮落と、功利的害毒と、物質的文明の積弊とより、良知が麻痺して正邪善惡の區別が出來ない所から起つて居るのである、此の病を癒すべき靈藥は外ではない、全く博愛を説く道徳や宗教を振興して、徹底的に愛の眞味を宣傳するにあると信じます。(完)